

オープンサイエンスの深化と推進に関する検討委員会
(第24期・第6回)

議事録

1. 日時 令和元年6月7日(金) 10:00-12:00

2. 会場 日本学術会議6階6-A(1)会議室

出席者(五十音順、敬称略): 相澤 清晴、安達 淳、喜連川 優、木村 学、
久留島典子、澁澤 栄、引原 隆士、村山 泰啓、渡辺美代子
オブザーバ参加: 上村みどり(帝人ファーマ株式会社生物医学総合研究所
上席研究員)、山地 一禎(NII)

3. 議題

1. 前回議事録確認
2. 情報提供1 (久留島委員)
3. 情報提供2 (上村上席研究員)
4. その他

4. 配布資料

資料1 第5回議事録案

追加資料1 人文学のオープンデータ事例(久留島委員)

追加資料2 化学データの戦略的収集と戦略的創出(上村上席研究員)

5. 議事

1. (議事録確認) 前回議事録案を承認した。
2. (情報提供1) 久留島委員から、追加資料1に基づき人文学のオープンデータの事例7例について報告があり、日本における人文学系データの公開の特徴と課題について説明があった。この報告とその後の意見交換の主な点は以下の通り:
 - 国会図書館では原本保存のためのデジタル公開として実施している。国立公文書館は文献資料の階層構造を持つという特徴がある。アジア歴史資料センターは複数の所蔵機関からのデータを提供している。百合文書は京都府が提供し多様な検索機能を持つのが特徴である。大蔵経テキストデータベース研究会は、英語でも検索できる。情報・システム研究機構の人文学オープンデータ共同利用センターで古典籍データベースやくずし字のデータが公開されている。
 - 人文学系のデータベースの特徴は、資料を持つ機関が提供することが多いこと、画像が先行し全文データが必ずしも用意されていないこと、研究過程の公開ということはほとんどないこと、データベースの引用という習慣がないこと等があげられる。
 - 科研の支援を受けて作成されたデータベースを継続的に発展させることが難しい。

3. (情報提供 2) 上村上席研究員から、追加資料 2 に基づき、化学分野における研究データに関する報告があった。この報告とその後の意見交換の主な点は以下の通り。
- 創薬のプロセスで AI と既存データを活用して検証のサイクルを短くする取り組みが急速に進んでいる。
 - 日本ではデータベースの戦略や中核センターが欠けており、発展がない。AMED を中心に統合されつつあるが、欧米に比べて規模が小さい。またデータ利用に制約がある場合がある。多数のデータベースをネットワーク化することが必要である。我が国のタンパクの PDB は極めて有用でその維持発展が重要である。
 - データベースを維持していくための人材が重要である。
 - 創薬ではデータのオープン化にすんなりとは進みにくい面がある。完全なオープンではなく部分的な共有の過程があってもよいのではないか。
4. (その他) 委員長から、次回開催日時は調整して決定したい旨の発言があった。

以上